

肢体不自由児へのキャリア教育の検討Ⅲ

－特別支援学校（肢体不自由児（者））の卒業後の社会参加にむけた指導の在り方－

企画者	類瀬 健二	（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
司会者	西垣 昌欣	（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
話題提供者	類瀬 健二	（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
	岡部 盛篤	（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
指定討論者	分藤 賢之	（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課）

KEY WORDS: 肢体不自由教育 キャリア教育 育てたい力

【企画趣旨】

筑波大学附属桐が丘特別支援学校（以下、当校）では、平成24年度より、筑波大学附属学校改革事業、文部科学省インクルーシブ教育システム構築事業、文部科学省キャリア教育・就労支援等の充実事業において、肢体不自由児の自立と社会参加に関する実践研究に取り組んできた。この研究は、とりわけ、高等部卒業後の社会生活で、職業に就くことや、自分なりの社会的な役割を担って生きることを目指す肢体不自由児が、社会参加を叶える上での課題抽出を、「学校の教育活動」「障害の程度や状態」「社会環境」の観点から行った。そこからは、「在学中の指導の在り方」「効果的な指導、就労支援の工夫」「社会との連携」の3点が課題として浮かび上がってきた。

本シンポジウムでは、これらの課題について、当校での検討を報告し、特にキャリア発達を促すための学校の教育活動全体を通じた指導の在り方について議論を深めたい。

【話題提供者の要旨】

(1) 社会参加における3つの課題

平成27年度特別支援学校（肢体不自由）高等部卒業者の就職率は5.8%と、他障害種を含む平均就職率28.8%を大きく下回っている。その一方で、社会福祉施設等への入所・通所者は、84.9%と他障害と比較して群を抜いている現状が存在する。当校高等部の生徒は、他校と異なり大半が高等学校の各教科・科目によって編成される教育課程に在籍しているが、高等部卒業時、高等教育機関や職業訓練機関等を経て一般就労へ従事した者は27名いるが、そのうち、介助を伴う者はわずか3名であった。そのことから福祉や産業界と連携し、実態に即した柔軟できめ細やかな就労支援等の検討が必要であると考え、介助付通勤実習や在宅実習の実施、福祉・産業界・介助を伴う者へのインタビューを基に、多様な働き方について検証を実施した。

一方、卒業後における肢体不自由児・者の課題を把握し、当校に在籍している児童・生徒に対して必要な指導や支援の在り方について検討するため、各種調査や検証を実施し、次の2点について、検討を進める必要があるとおさえた。

- ①障害特性や、それが起因する学習上又は生活上の困難を踏まえた、在学期間（12年間）にわたる系統的・連続的な指導の在り方の検討
- ②学習上又は生活上の困難を補うための指導や、効果的な就労支援の工夫に関する検討

なお、これらの検討には「主体的な思考」を軸に、育てたい力を明確にすることが求められると確認した。

そこで、課題を解決する過程を自ら考え、適切な行動様式を探る等の具体的な学習を、中核となる指導として取り上げる必要がある。その一方で、この学習の本旨である「試行錯誤」を支えるのは、各教科等で身につける基礎的・基本的な知識・技能である。思考への土台があることで、働くこと・生きることを具体的に考える学習が可能になる。

そこで、当校は、生徒の基礎的・基本的な知識・技能の習得、並びに、思考力の育成に向け、学校の教育活動全体を通じた指導の在り方を見つめ直し、教育課程の編成を有意義に行うための検討を開始した。まず社会への窓口となる高等部の指導改善への動きを中心に取りあげる。高等部では、学校の教育活動全体による指導、効果的な就労支援について検討を行うため、具体的な活動から思考力を育成する学習の時間「総合的な学習の時間」「特別活動」学校設定教科「職業生活と進路」の指導内容の見直しを実施した。

教員の視点共有に向けた取り組みおよび生徒への指導実践を紹介しながら、肢体不自由児に必要なキャリア教育の在り方について議論したい。（類瀬 健二）

(2) 12年間に渡る指導の方向性の明確化

当校では小・中・高12年間に渡る指導の方向性を明確化するために、全教員を対象に次の研修を行った。

- ・「教員アンケートや実習評価の分析を通じた、児童生徒につけてほしい力に関する情報交換」
- ・「卒業生へ現状の生活と学校生活の振り返りに関する聞き取り調査」
- ・「企業との社会参加に関する共同授業の検討」

これらの研修では卒業後の活躍と課題を全教員が共有しそれぞれの立場や役割から指導の在り方を検討することを目的とした。その後の教員の意識調査からも教員のキャリア教育への意識の変化が見られた。また、昨年度は各学部で育てたい力について検討を行ったが、小・中・高の12年間を見渡しての再確認を実施する中で、卒業後にどのような力が必要なのかをふまえた検討がなされた。さらに、各学部の「総合的な学習の時間」や「自立活動の時間の指導」などを中心に各教科等でも指導に変化が見られた。

特別支援学校学習指導要領等の改訂のポイントの一つとして「卒後の視点を大切にしたカリキュラム・マネジメントを計画的、組織的に行うことを規定」することが示される中、今回は、当校の取り組みを参考に、全教員がキャリア教育の視点を持って教育活動を行うための体制や仕組みの工夫について議論を深めたい。（岡部 盛篤）

【指定討論者の要旨】

各教科等の指導に当たって、生徒自らが学習過程の中で、学ぶことの意味を自分の人生や社会との在り方と主体的に結び付けたり、対話を通じて考えを広げたり、身に付けた知識等を他の学習や場面で活用できるようにするなどの資質・能力を働かせ鍛えていくことは、生徒のキャリア発達を促す大切な視点である。準ずる教育課程において、キャリア教育の充実を図るために、どのような視点で授業改善を図ると効果的か、特別支援学校学習指導要領の改訂を担う立場から、本研究の成果、及び、課題について言及する。

（分藤 賢之）

(RUISE Kenji, NISHIGAKI Masayoshi, OKABE Moriatsu, BUNDO Noriyuki)